# 随想　やはり、日本人は大人したものだ！

㈱ＰＰＱＣ研究所　加藤　宏光

青山繁晴参議院議員の開設している《ぼくらの国会》というYouTube番組がある。いろいろな情報を得られるので、ここ二年ほどは運転かたがた常に聞くようにしている。

かなり右寄り（右翼）ではあるが面白い切り口で、時事の政治問題を取り上げて解説してくれるので、自分の知識や思考方法の検証にも有益である。

毎回のトピックスのあとに、彼がこれまでに経験したさまざまな出来事が紹介され、これはこれでなかなかのものである、と常々感心させられ、また笑わされている。その一三四回目に紹介されていたエピソードがとくに気に入った。エピソード概要を以下に述べる。

彼がまだ記者であった（共同通信の政治担当）ころのこと。ヒースロー空港で、ノースウエスト機に搭乗し、離陸待ちをしていた。隣にアメリカ兵が乗り合わせ、打ち解けて話に花を咲かせていても、いっかな離陸しない。ふと外を見ると、雪で真っ白である。スチュワーデスに

『雪で離陸できないの？』

と聞くと、

『そうよ。外を見ればわかるでしょ！』

といった素っ気ない返事。

このような際の日本人とアメリカ・イギリス人等の対応差は歴然としている、と彼は話している。著者もいろいろな国へ情報を得るため出かけてきた。そうした経験の中でも、まったく同じように思うことが多い（欧米人のサービスは、チップと繋がるときとそうでないときで随分違うように思われるが…）。

（再度青山氏の話）隣の軍人と話が弾み、随分時間が過ぎてもいっかな離陸しようとしない機の窓からのぞくと、ジャマイカの航空機からスタッフが降りてきて、雪合戦をしながら遊んでいる（乗客はそのまま機内で乗員が勝手に遊んでいるというところは、その国の個性を感じる）その傍らをＡＮＡの機がゆっくりと通り過ぎた。『あれ！』と思っているとしばらくして、その機が離陸して行ってしまった。それから時を経ず、今度はＪＡＬの機が同じように通り過ぎて行く。この機も先と同じく離陸。それからは何時間も、どの機も動きがない。

―中略―

帰国してからＪＡＬ、ＡＮＡに問い合わせたそうである。その結果両社共、パイロットを、含むスタッフが総動員で、機の周りから滑走路までの道筋を《雪掃き》して、滑走路へ出ることができたので離陸が可能であった、とのこと。このエピソードは、いかにも日本人の気質をよくあらわしている。

著者が生産現場を巡回するに際して、死亡例に出くわしたり、集卵ベルトの異常で卵がモリモリに盛り上がっているのを見かけたりことがある。そうした際には《死亡例を取り除く》あるいは《ベルトを調製し卵の流れ



を整える》のは当然のこととして、行動している。

これらのコトは、当人の自覚に基づくべきと考えているため、著者のラボの若いスタッフ（教育のため時々現場に同行）に直接教えたことはない。

過日、ある大型生産農場を巡回した際のこと。そのときは、若い獣医師スタッフを彼の研究テーマについての研修・教育を目的として、著者と行動を共にさせた。

鶏群の全体を観察するためそれぞれが別れて巡回していたのであるが、たまたま、彼の巡回する道先に死亡しているモノがあった。それも、死後相当日数がたっているため、かなりの腐敗臭を放っているし、普通の、人なら、まず触るのを躊躇するレベルである。彼の視界から外れている位置にいた著者は、彼がどのようにするかを《コッソリ》見ていた。

彼はその位置に来て、ためらうことなく素手でその死体を引きずり出して処理し、何事もなかったように巡回を続けたのである。また別の鶏舎では、集卵ベルトがよじれ、その場所に卵が盛り上がっている。そこへ先にたどり着いた彼は、何百を越える、それこそ塁卵となっている卵、卵を別のベルトへ移し、薄めて、ベルトのよじれを戻していた。著者が手伝っても五分は楽にかかる作業を、やはり当然のこととして済ませてから巡回を、続けたのである。

当日の巡回を終えた帰途で、先の腐乱死体処理については触れもしなかったことから、彼の日常巡回姿勢がそうしたものであることは、想像に難くない。

青山代議士の語った先のエピソードと著者と同行した若いスタッフの行いは、源を同じくするものであろう、と著者には思える。

しかし、同じ日本人についてのエピソードでも、趣の異なるモノもある。今から、三〇年近くも前のことであるから平成の初期である。バブルでディスコが盛況であった時分に、よく《新人類》について語られたものである。

『最近の若者は自分たちとはどうも判断基準が違う』と語るのは当時五〇歳前であった著者の世代（もしくは以上の年代）。今とはずいぶん異なる空気の会社空間でのエピソードが通説として話されていた。以下のようなものである。

ある課長（係長・部長かもしれない）が同僚にぼやいていう。「どうにも最近の若者世代の感覚はわからん。会社のロビーを歩いていたら、ゴミが落ちている。そばにいる新入社員がそれを見ても拾おうともしない。そこで、私が拾って見せると、その新人社員が私に向かって『課長、ここにもありますよ！』と指さすのだよ。いかにも腹が立って、『見つけたら自分で拾わんか！』と叱ったところ、その新人は『いって下されば拾いますのに…』と不服そうなんだ…」うんぬん。

この話が本当かどうかが問題なのではない。かつては、ゴミを見つけたら、自主的に拾うのが常識だったのだが、三〇年近く昔ですら、すでに新世代の常識が変わってしまっていた、ということ自体を問題と思う。

一方、現在アメリカ大リーグで二刀流選手として大活躍の大谷翔平選手の人気には、選手としての技量が卓越しているだけでなく、グラウンドでゴミを見つけると、何気ない仕草で拾っている。その姿が《美しいもの》とアメリカの観客の心に訴えている、とマスコミでは報道している。

そうしてみると、現代でも昔と同様の心ばえの若者もいるし、三〇年前にすでに自分の周りにしか目が届かない人種もいた、ということにもなろう。

改めて、社会人として人と人の関係を潤滑に保てる人が、これからどんどん増えてゆくために、大人たちが子供に対して《どうあるべきか》の規範を見せ続けることが重要と思う。

《日本人の良さをどのように受け継いでゆくべきか》等と考えながら、YouTube番組を聞いていた。